

イギリス中世の村落共同体

長島 武敏

イギリス中世において村落共同体が存在していたことは、未だ否定されてはいない。近年の著名な概説書である M・M・ポスタンの『中世の経済と社会』においても、E・マラーと J・ハッチャーの『中世イングランド—農村社会と経済変化一〇六六—一三四八』においても、村落共同体 (the village community, the community of the village) という言葉は現われているし、村落共同体について裁判に関してや、道路や橋の維持といった日常的業務等どちらかといえば行政的な事柄、またマナに対する村落の共同活動といった事であり、直接生産活動に関連するような事柄はほとんど述べられていない。勿論、共同の土地利用の存在や農業活動がある程度は共同で行われなければならなかつたことも触れてはいるが、それらは耕地制度をめぐる問題として別に扱われ、村落共同体にとって中心的な課題ではないかのようにさえ見えるのである。そして、この言わば「村落共同体論」から分離された形での「耕地制度論」については、最近活発に議論が展開されている。

イギリス中世の耕地制度に関しては、初期の H・L・グレイや C・S・&C・S・オーヴィンの研究が有名であるが、近年 J・サースクが『共同耕地 (The Common Fields)』なる譜文で、共同耕地の中世初期の存在を否定し、それが人口の増加を原因として成立する

もので、少なくとも十一・二世紀以降にならないと出現しないという議論を開いて問題を投げ掛けている。このサークスの説に対しては、最近出版された『イングランドの共同耕地』において E・ケリッジが真っ向から批判を加えている。

本報告では、村落共同体にとってもっとも重要な機能は直接生産活動に関連するものであるとの観点に立って、こうした最近におけるイギリスでの耕地制度、特に共同耕地についての研究を紹介しながら、そこで展開されている共同耕地の議論が何故村落共同体とは無関係に見えるのか、そして「村落共同体論」の中で整理するとすれば、どの様に考えればよいのかの手掛かりを得ようとするものである。